

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011 年 8 月 4 日

派遣者氏名（専門分野）	原田 走一郎（日本語学）
-------------	--------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	南琉球八重山黒島方言の文法記述 －言語記述の技術・方法を学んでこれに活かす－
-------	---

派遣期間

2011 年 7 月 5 日 ～ 2011 年 8 月 4 日

訪問 研究 機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	アメリカ	ボルダー	コロラド大学ボルダー校	アメリカ言語学会

派遣先で実施した研究内容

派遣者は、コロラド大学ボルダー校にて開催されたアメリカ言語学会主催の Linguistic Institute 2011 に参加し、言語記述の技術や方法を学んだ。このイベント自体は、レクチャーを主体にして構成されているが、ワークショップや時間外のミーティングも多くあった。

(1) まず、派遣者が参加した Field Method のコースにはレクチャーはなく、まったく資料のない状態から実際に言語の記述を行うというものであった。派遣者は、オーストラリア国立大学の Nicholas Evans 教授の指導のもと、11 人の研究者と共にパプアニューギニアの言語である Idi 語の調査を行った。この言語に関する詳細な調査はいまだかつて行われたことがなく、我々のプロジェクトが初の試みであった。つまり、我々の残したデータがこれからの Idi 語研究の基礎となるべき資料となるということであり、このコースは本当の意味で実践であった。

我々は、この言語の母語話者である Wasang Baiio 氏をインストラクターとして、ほぼ毎日、なんらかの調査を行った。手順としては、言語記述の基本に忠実に、まずは基礎語彙を集め、その作業を通して、音素の設定を行い、それに基づき、表記法を定めた。続いてそれに基づいて話者の内省を問う文法の調査を行った。さらに、話者に短いストーリーを話してもらってそれを書き起こしそれに訳などをつけていく、テキストの収集も行った。

今回の調査で非常に印象深かったのは、話者に対する確認の仕方である。ある語を記録するときに、その音列を聞いて記録して終わり、ではなく、まずは調査者が繰り返し、その発音の良し悪しを話者に確認してもらう。時には、わざと違う発音をして、それが違うと判断されるのか、それともそれでよしと判断されるのか、徹底的に確認を行う。現代の言語学的フィールドワークでは、録音を行うのが常識であるが、録音にのみ頼るのではなく、このような徹底した確認を伴った調査は必要である。これは、文法の調査にも同じことが言える。微妙に言い方を変えた例文がよしとされるかどうか、このテストを常に怠ってはならない。また、得た資料（録音の場合も、文字によるもの）には必ずメタデータを付すよう徹底した。これはつまり、誰がどこでどのような状況で得た資料であるのか、ということを資料そのものに残しておく、

ということであり、危機言語の資料を残す場合には非常に重要な要素となる。

また、言語記録用のアプリケーションである FLEX や ELAN を実際に用いながら調査を進めたため、その訓練にもなった。これらのアプリケーションの注意しなければならないところは、そのアプリケーションの得意なやり方でのみ言語を分析してしまいがちになる点であるが、その点に十分注意すれば、FLEX は日本の諸方言の分析には適しており、今後アプリケーションの改良と日本語訳が進めば積極的に活用できると考える。ただし、生の言語を実際に自分の頭で分析する能力をつけることが第一であることは間違いないが。

我々の調査の及んだ範囲では、Idi 語には、子音が 22、母音が 7、基本語順は SOV、能格・絶対格型の格体系を示す構文も観察された。また、動詞は主語の人称 (1/2/3) 及び数 (単/双/複) のみならず、目的語の人称・数にも一致をする。形態論的には非常に複雑に接辞を用いる。

(2) Field method のコース以外では、アメリカの方言研究の第一人者である Dennis Preston 教授 (Oklahoma State 大学) と方言研究のあり方を話し合った。方言研究は理論に直接コミットしないことが多く、ただ資料を集めているだけだと批判されることがあり、それを派遣者も気に病んでいたが、Preston 教授には、そのどこが悪いのか、と力強いことばをかけられた。確かに、方言や言語が急激なスピードで消滅している現在においては、資料の収集に力を傾けることがより求められており、その点においては、資料収集を単純に批判するのは的外れであると言える。ただし、現在日本の方言研究において用いられている方法で収集された資料に本当に再利用可能性があるかどうか、ほかのよりよい資料収集の方法があるのではないか、という点については議論が必要であり、見直されるべきである。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

研究の当初の目的は、言語記述の技術や方法を学ぶことであった。言語記述の方法は、録音や録画の技術と共にほぼ日進月歩であるため、この目的を完全に達成することは不可能であるが、現在のところの派遣者の計画は達成できたように思う。

技術的な面では、日本では扱うことのなかった FLEX や ELAN というアプリケーションの操作能力を身につけることが出来た。日本ではそう普及していないが、世界の言語学界ではスタンダードになっているアプリケーションなので、これを用いて発信することが出来るのは強みになると言える。より言語の分析に近い面では、簡単な構造から難しい構造へと記述を積み上げていくことがいかに重要であるか、ということ学んだ。そうすることによって、仮説を早い段階から立て、それに修正を加えていくことでより早く言語の構造を明らかにすることが出来るのである。日本の方言研究ではいきなり大量の資料を集めることがあるが、今回の調査はこれとは大きく異なり、自らの調査方法を再考するいい機会であった。

派遣後の研究発表の予定

日本方言研究会の 2011 年秋の研究発表会に申し込み済み。